

Bチャレ 新たなつながり部門 実績報告書

団体名	文京アートプロジェクト	作成日	3月 26日
事業名	街じゅうボーダーレスアートミュージアム構想		
協働団体	<ul style="list-style-type: none">・ 特定非営利活動法人アート・コミュニケーション推進機構(PARC)・ 一般社団法人タップタップラボ・ 玉置プロダクション・ アカデミー推進課・ 区民課・ 広報課・ 障害福祉課・ 区内媒体（文京経済新聞、東京ケーブルネットワーク）・ 区内団体等（高橋工房、文京メディアブリッジ、ねづくりや、Tammy、鳳明館、他）・ 区内図書館、地域活動センター等・ 区内障害者施設（リアン文京、若駒の里、工房わかぎり、は〜と・ピア、は〜と・ピア2、小石川福祉作業所）・ 筑波大附属視覚特別支援学校、文京盲学校口・ 文京区障害者就労支援センター口		
自団体及び協働団体の役割分担	<ul style="list-style-type: none">・ 自団体：企画提案、進行管理、アート作品発掘・選定、ブランディング、広報物・掲示物制作、展示プラン等・ PARC：コミュニケータによる鑑賞サポート・ワークショップの実施、集客・ タップタップラボ：iPad貸与及びiPadを使ったサポート提案、触図の作成、広報物・掲示物制作補助・ 玉置プロダクション：設営・ アカデミー推進課：会場確保、広報（ポスター・チラシの発送、広報紙等への掲載手配等）・ 区民課：B-ぐる及び区設掲示板へのポスター掲示・ 広報課：区報掲載、区民チャンネル放映、SNS発信等・ 障害福祉課：ハートフル工房販売会同日開催・ 区内媒体：記事掲載、番組でのイベント紹介・ 区内団体等：ポスター掲示、及びPR協力・ 区内図書館、地域活動センター等：広報協力・ 区内障害者施設：利用者作品の提供、ワークショップ開催等の協力、展示協力・ 筑波大附属視覚特別支援学校、文京盲学校：生徒作品の提供、展示協力・ 文京区障害者就労支援センター：ハートフル工房販売会同日開催、連絡会における施設間の情報共有、広報協力等		

提案背景・目的	<p>文京区の潜在的アート作品を展示することにより、区の魅力（文化的価値）向上に寄与するとともに、より多くの方が文化に触れ楽しむ機会をつくることを目的として、本企画を提案します。</p> <p>令和4年度・5年度とBチャレ事業で同テーマの提案をし、文京シビックセンター・ギャラリーで展覧会「Bunkyo Brut」を開催、5年度にはさらに地域の複数拠点での回遊型の小規模展覧会も開催しました。展示作品は、区内障害者施設の日中活動で制作された作品群と、本会のために施設で取り組んでいただいた「名画の模写」です。それらの作品を起用した開催周知用ポスター（複数種類）を区設掲示板等に掲示することで、より多くの区民の目に触れる工夫もしました。また、開催当日はアート・コミュニケータが会場に常駐し、対話による鑑賞やワークショップを行うことにより、作品への理解を促しました。昨夏の展覧会では4日間で千名近い来場がありました。リピーターの来場者も散見され、「ぜひ継続してほしい」との声を多くいただきました。出展施設の職員の方々や、会場提供してくださった団体の方々からも好意的な感想を多くいただいております、少しずつですが、地域や文化のボーダーを低くできているように感じています。</p> <p>一方で、この2年間の取り組みの中で、文化のボーダーを低くすることに留まらず、見出した作品の価値を我々主催者以外の視点から再評価していただけるような機会も必要ではないかと考えました。また、今後さらに各地域に展開することを目指す上での気づきもありました。特に課題としてあげられるのは、各施設の作品管理の問題です。展示スペースが見つかったタイミングでスムーズに展覧会を開催するためには、収蔵作品のリスト化など、管理面での環境を整えておく必要があると考えます。作品の再評価をするとともに、管理面を強化することにより、今後、ギャラリーシビック以外での展示の機会を得た際にも柔軟な対応が可能となるでしょう。それらを踏まえた上で、令和6年度は、この2年間の「Bunkyo Brut」の軌跡を検証しつつ、さらに関係性を広げていくことを目指します。</p>
	<p>▼9月の展覧会開催に向けて、5月7日より区内施設へ告知・協力依頼をしました。</p> <p>▼6月3日～28日を第1回作品選定期間とし、施設より作品データを収集。担当職員の方々と連絡を取りつつ、ポスターに使用する作品を決定しました。</p> <p>▼7月よりポスターとチラシのデザイン作成に着手し、7月17日に入稿、7月29日に納品。順次、配布を開始しました。</p> <p>▼7月22日～8月9日を第2回作品選定期間とし、引き続き施設より作品データを収集。7月30日からは支援学校の作品を収集しました。</p> <p>▼8月27日に施設管理係との打ち合わせを経て、9月5日に展示レイアウトを確定。並行して、8月下旬より額装の準備を開始しました。</p> <p>▼出展作品が確定したところで、9月より触図制作に着手しました。</p> <p>▼9月1日にはコミュニケータ向けの説明会を開催しました。</p> <p>▼9月9日～14日、区設掲示板とB-ぐるにポスターを掲示していただきました。</p> <p>▼9月10日に「文京経済新聞」に告知記事を掲載いただきました。</p> <p>▼9月14日～17日、ギャラリーシビックで展覧会を開催しました。</p> <p>▼9月17日に文京区民チャンネルの現地取材があり、9月30日～10月6日放映の番組「ナイスキャッチ文京」にて展覧会をご紹介いただきました。</p> <p>▼9月13日の設営日及び9月14日に東京ケーブルネットワークの現地取材があり、10月21日～27日放映の番組「イイコトSDGs」にて展覧会をご紹介いただきました。</p>

事業内容

展覧会の開催期間は昨年度同様の4日間。参加施設は昨年度より多い6施設。加えて支援校2校の協力を得てアート作品を収集・精選し、文京シビックセンター1階の展示室で作品展を開催しました。作品の利用に際しては、施設職員及び教員のみなさん経由で作家のご家族への承諾をいただきました。出展作品をモチーフとして、文京アートプロジェクトが告知用のチラシとポスターを作成。ポスターは各区内施設（図書館やアカデミー施設等）へ配布し掲示依頼したほか、開催前1週間には区設掲示板とB-ぐる車内へ掲示しました。

また、今回は視覚支援学校からの出展があったことから、「触れる展示作品」について企画し、見えない方向けの作品鑑賞プログラムの経験を持つタップタップラボの協力を得て「触図」の作成等にも取り組みました。

作品展当日は、タップタップラボの協力により、聞こえない方にはiPadの筆談アプリを使った対話型鑑賞も行いました。用意したiPadでは、外国籍の来場者対応に翻訳アプリや、見えない方のために画像読み上げアプリなども活用しました。

また、会場にはNPO PARCの協力のもとアート・コミュニケータを配置し、来場者との対話による鑑賞を随時行いました。アート・コミュニケータが作品についての印象を問いかけ発話を促すことで来場者の気づきを引き出したり、作品の背景や作家についてのエピソードなどを提供することで作品への理解を深められたことが、会場で行ったアンケート結果等からも看守できました。適宜ギャラリー周辺での呼びかけなども積極的に行い、通りすがりの来場者を多数呼び込みました。

NPO PARCにより、アート・コミュニケータが介入した鑑賞の前後で作品に対する印象の変化を可視化できるオリジナルツール「うちわdeドン」を使った鑑賞サポートプログラムも随時実施しました。一見実感しにくい「対話」の成果を、座標軸という理解しやすい形式で示すことのできるツールは好評で、来場者の多くが「作品を鑑賞すること」の楽しさや、他者と感想を共有することの心地よさを体感いただけたようでした。

会場の一角には障害特性による作品制作の一端を体験していただくための「来場者のための制作コーナー」を設け、自由に描いていただく機会を提供しました。「レシート大の紙をひたすら丸める」「フリーハンドで引いたマス目に色鉛筆で着色する」といった展示作品の制作過程の一端と同様の体験に、夢中になる来場者の姿が多くありました。

昨年度に来場されたというリピーターの方や、掲示板のポスターを見て訪れたという声も多数聞くことができました。

その他、9月の展示期間には、「アート・ウォール・シビック」にてリアン文京による作品展の枠があったため、その出展内容を文京アートプロジェクトで検討し、「Bunkyo Brut」と連携させる展示にしました。また、「Bunkyo Brut」最終日は障害福祉課主催の「ハートフル工房販売会」の開催日に充てており、「出展作家の商品を購入できる」というアナウンスをするなどして連携を試みました。

▼2月には、3年間の集大成として、これまでの「Bunkyo Brut」を振り返るアーカイブ冊子を作成しました。□

▼来場者の主な感想

「また開催してほしい」「もっと頻繁に開催してほしい」「心が癒された」「キュレーションに温かさを感じる素晴らしい展示だった」「手の感触だけで鑑賞を楽しむことができた」「作品を観て、自分でも何か作ってみたい気持ちになった」等は、アンケートの自由記述欄に散見される感想でした。その他、主なものは以下。

- ・障害の有無に関係なく、表現の方法は様々だと感じた。
- ・一人で鑑賞していて「あ～これいいな」と声に出して言いたくなったタイミングでコミュニケーターが近くにきてくれて嬉しかった。
- ・昨年一昨年もきて楽しんだが、今年は支援学校の生徒さんの作品も加わり、さらに充実していた。
- ・（目が不自由なので）今までは芸術分野は耳で楽しめる音楽を中心に興味があつたが、コミュニケーターと話しながら作品の背景を知ったり、色などのイメージを聞くことで作品がイメージできたことがとても嬉しかったし驚きだった。美術作品に対して、触ったりするだけでなく対話から理解するという関わり方があることを知ることができてとても嬉しい。コミュニケーターがいる展示にはこれからぜひ行ってみたい。
- ・会場前で呼びかけられて立ち寄った。コミュニケーターの方と、作品を見ながらの対話から、学生時代の話にまで及び、とても充実した時間を過ごすことができた。

▼コミュニケーターの主な感想

・鑑賞を目的にいらした方は、参加施設の概要をみたり、コミュニケーターとの対話を楽しむなど、もちろん鑑賞に積極的でした。それ以上に、通りすがりや呼び込みで来場された方が展示に引き込まれていく様子を感じました。参加施設の概要を読み、身近な施設がどんなところなのか、利用者がどのような作業をしているかなどに興味を持ったり、視覚支援学校の生徒がどのように美術作品に取り組むのか理解を深めたりしていました。

・海外の方が立ち寄られたので英語で対応しました。触る展示なども体験いただいた後、「作家のエネルギー、色彩の選び方、感性の強さに感動した」「よい展覧会なので、ぜひたくさんの人に観てほしい」とおっしゃっていました。

・会場前でポスターを手に呼び込みをしていると「通学の時に掲示板を見て気になっていた。実物があるなら見てみたい」と言って入られた学生さんがいらっしゃいました。他にも「涼しいなら入ってみる」「座れる椅子があるなら入ってみる」「待ち時間で暇なので入ってみる」「用事があるので5分くらいで見られるなら」「展望ホールの帰りに寄ってみる」「ディズニーコンサートの前に」等々、様々な方が入場してくださったが、本展覧会を目指していない方が展示室内で長時間熱心に鑑賞されている様子が多かった。（有名な作品があるわけではないので来場のハードルは高いかもしれないが）展示室内に入ってもらくと、作品とコミュニケーターの力で来場者も楽しめる展覧会だったと思う。特に強い興味がないような人が、コミュニケーターと会話をする中で理解が深まって、作品をより熱心に見る様子を見ると、本展覧会のような街場の開かれた場で、一見分かりにくい作品に対して、コミュニケーターを配置する意義が大きいと思えた。

・展示室内で、自然と来場者の間やコミュニケーターの間で会話が生まれたり、全員がそれぞれの心地いい状況で作品を鑑賞できる環境が確保されている良い展覧会だったと思う。

・ゆっくりじっくり鑑賞している方が多い印象でした。撮影禁止だったのも鑑賞に集中するためには良いような気がしました。

・1人でいらした方もコミュニケーターがそこにいることでふと感じた事を話してくださったりと鑑賞を楽しんでいただけているようでした。ワークショップコーナーではお子さんから大人まで夢中になって色を塗ったりくるくる丸めたりを楽しんでいました。

**協働団体
or
利用者の声**

自分なりの塗り方をあみ出したりそこから派生した作品になっていたりと作品からさまざまなインスピレーションを受けていたようです。そういった空間作りに少なからず関わってとても楽しい時間でした。

・「盲学校や施設が近くにあることは知っていたけれど、どんなことをしているか知る機会がなかったのでこういった展示作品を見ることができて良かった。今後も続けてほしい」という来場者の声を聞き、開催した意義を感じました。

・3年目の活動となり、どうしてもこれまでの展覧会と比べてしまうこととなりますが、回を重ねるごとに作家名やタイトルとともに展示される作品が増えていくようで、施設やご家族を含めた意識や環境の変化を感じました。また、盲学校/視覚特別支援学校からの出展、触れる作品展示、控えめだけ作品が生まれる過程を追体験できるようなワークショップ、出入口を1箇所にしたことやアンケートによって回遊性が高まった展示空間など、これまでの展覧会を進化させる工夫やチャレンジにも感激しました。

・とても充実した4日間だった。なんとといっても、展示準備も早くできるようになり、集大成としては展示もよかった。

・呼び込みした人に、見終わった感想を聞くと、すべての人が「素晴らしい」と言ってくれた。声をかけてくれたよかったと言われて、こちらもうれしい。

・素晴らしかったとかいう感想は何度も聞き、その感想はもうあまり印象に残らなくなってしまう。ただ、その中に「去年とくらべて…」「確か前回は…」とかいう感想が何人かのお客さんからあり、リピーターが来ていることを実感した。

▼施設の方の主な感想

- ・家族は非常に喜んでいて多く、実際に見に行ったとの報告を受けている
- ・自分の作品が飾ってあったと、ご家族と一緒に喜ばれていらっしやった
- ・利用者の作品をみたよ！と声を掛けられ、施設内の活気が良くなったように感じる
- ・利用者の作品の見せ方で、作品のイメージが大きく変わることなどを知った
- ・利用者の作品が展示された様子を見て感銘を受け、自身の施設のみではなく他施設の作品を見ることで新たな気づきを得られた
- ・3年間で利用者の作風も変わり、職員も変わり時代の流れを感じた
- ・区内でこのような展示がなかった中、文京ブリュットは3度開催し、毎年の作品のクオリティも高くなってきているように感じた
- ・障害者アートの展示に関して色々な考えで皆さんが企画し展示しているので勉強になった
- ・問題行動と思っていたことの副産物が「アート」としてみられたことで、利用者に対する職員の気持ちが寛容になったように感じる

▼支援校の先生方の主な感想

- ・学校以外で外の方に向けて作品を発表する機会はほとんどないので、ありがたかった
- ・障害者が作ったものだからという理由で一律に並べるのではなく、美術作品として丁寧に展示していただけてとても嬉しかった
- ・地域の方にみていただいて、学校の存在を知っていただく機会にもなれた

	<p>▼担当課（アカデミー推進課）からの主な感想</p> <ul style="list-style-type: none">・展示作品の収集方法、選別基準、対話型鑑賞の実施方法、活動の展開など、今後の課題が見えてきたと思います。一方で、施設の職員の方々から、利用者の方の作品を積極的に展示したい、新たな作品分野に挑戦してみたい、施設内の作品管理について改善したい、といった意向を聞くこともでき、次年度から創作者のサポート行う方への支援を区で行う方向に繋がられた点がよかったと感じます。・別イベントでの来場者アンケートに、「R6/9のBunkyo Brutのアンケートで書きそびれたので、こちらに書かせていただきます。作品そのものだけでなく、感情の発露としての服のきれはしもまとめて展示してあって、創作活動の裏側の感情をうかがえるもので、凄く「アート」だなと感じました。とてもよかったです。」とありました。こうした記述や、過去の実績報告に記載されている来場者アンケートにおいて、額装等を行っての展示及び制作背景の解説等があることで、来場者が作品をアートとして鑑賞できたと感じる声が複数あったことから、区役所内で区民や来庁者にこの鑑賞機会を提供できる点が、この企画の強みだと思いました。・（3年間開催した結果、庁内あるいは区内に影響を及ぼしたと感じられることについて）庁内では、障害福祉課が区内薬局と協力して作品展示を開始するなど、作品が「アート」として認識され始めていると感じています。障害福祉課との今後の連携も含め、区内での障害者芸術活動推進の取組の第一歩として、Bunkyo Brutが果たした役割はとても大きいと考えております。
協働による効果	<p>アカデミー推進課の協力によりギャラリーシビックという区民の行き交う区役所内の会場で展覧会を継続開催ができたこと、区民課の協力によりB-ぐるや区設掲示板にポスターを掲示できたことにより、Bunkyo Brutを区民に広く周知することができました。</p> <p>区内障害者施設及び支援校2校の協力により、充実した展示作品を集めることができました。作者（＝施設利用者）やその家族が一般区民と交わる貴重な機会ともなりました。</p> <p>3年目の開催となり、施設側に展覧会のイメージを持っていただきやすくなり、事前の設営等にもご協力いただくことができました。</p> <p>展覧会当日の連携により、新たな層への「ハートフル工房」の周知の一助となれたと感じます。</p>

成果目標の達成度	<p>「シビックセンター・ギャラリーでの展覧会を開催し、アート・コミュニケータによる対話型鑑賞を取り入れることで、様々な層の参加者に来場いただき、作品の感想などを共有する」という当初目標は、アート・コミュニケータが対話から拾った来場者の言葉や、会場で回収したアンケートの自由記述欄などから、概ね達成できたと感じられました。作品を精選し、額装や会場構成などを丁寧に施した発表スタイルも、これまでの施設作品の（全員の作品を一律・平等に展示する）展覧会とは異なる作品の見せ方として定着したと感じました。</p> <p>施設利用者の方々の作品を丁寧に展示し、多くの来場者に共感を持って鑑賞していただけたことは、施設の作品制作への取り組みや、施設職員の方々の利用者を見守る視点にも少なからず影響を与えることができたように思います。</p> <p>しかしながら、展覧会に向けて作品を収集・管理する作業を、現場の施設職員の方々が担うことは負担が大きいことも感じました。その意味では、今年度の当初目標であった「収蔵作品のリスト化」にはまだまだ課題が残りました。ニーズがあったタイミングで他の展示場所で作品発表する機会を逃さないためにも、作品管理の問題については引き続き検討していきたいと考えています。</p> <p>また、昨年度に来場者アンケートや当日会場での聞き取りなどで作品をグッズ展開してほしいという声を多く寄せられたことから、今年度はハートフル工房の同時開催を計画し、関係各所への調整にも尽力しました。ハートフル工房のPRとしては一定の成果があったと感じていますが、想定していたような（展覧会のミュージアムショップ的な位置付けでの）販売機会とするレベルにまで達することはできなかったという反省もあります。この点は、本プロジェクトだけでなく「ハートフル工房販売会」側の課題でもあります。所管課や施設職員の方々と情報共有をより丁寧に行って進めていくべきことと感じました。</p> <p>また、今年度は3年間の成果のまとめとして、アーカイブ冊子を作成しました。形として示すことで協力いただいた施設や作家のご家族に対しては作品を公開したことの成果（社会とのつながり）を実感してほしいという思いと、その他企業や美術関係者に対しては区の資産としてアール・ブリュット分野について文京区には一定のポテンシャルがあるということを知っていただきたいという思いがあり配布しています。アーカイブ冊子は今後の展開に向けた種蒔きであるため現時点での成果は示しにくいのですが、ギャラリーシビック以外での展示の提案や、作品を採用した商品化についてなど、少し具体的な話も動き始めています。</p> <p>SNSを通じた来場者による展覧会の感想などの発信については、数値的には測れていないが、友人知人の発信が気になって来場したという声はいくつか届いています。ただ、著作権等の問題もあり、会場内を全て撮影禁止にしたため、会期中の発信は難しい面もあったのではないかと感じました。</p> <p>一方、会期前、掲示板の12種のポスターをSNSにあげてくださった例が複数あり、その中で「全部の写真を撮って集めたら特典がもらえたらいいのに」との書き込みがありました。急遽、対応できるように用意しましたが、盛り上がるほどの周知に至らず残念でした。企画段階からそうした（スタンプラリーのような）遊び心のある仕組みを取り入れておければ良かったと思いました。</p>
-----------------	--

今後の活動予定	<p>区の事業として継続できるのであれば、これまで同様の展覧会開催を維持できるような体制を整えて協力していきたいと考えます。また、作品発表の場である展覧会の開催だけでなく、可能であれば作品が生まれる背景すなわち施設での創作活動の部分にも協力する機会を得られれば嬉しく思います。そうすることで作品への理解がより深まりコミュニケーターの展覧会当日の鑑賞に反映できるだけでなく、展覧会の準備において施設職員の方々との連携がよりスムーズになるメリットがあると考えています。これは上記にて反省点として挙げた「作品管理」の解決にもつながることと思われます。施設とともに作り上げる展覧会にしていけることが今後の理想です。</p> <p>また別途、連携団体と協力のうえ自主活動として、小規模スペースでの展示等、作品公開の機会は継続的に作っていきたいと考えており、並行して商品化等への展開も検討したいと考えています。3年間の活動により「Bunkyo Brut」という名称がある程度認知されたことも実感できましたので、さらなるブランド化に向けても検討していきたいと思えます。</p>
----------------	---

別紙1：事業スケジュール(報告版)

別紙2：収支報告書

別紙3：関係者マップ

※追加別添1：この事業を通じて制作したチラシなどのデータ

※追加別添2：この事業の様子が分かる公開可能な写真データ（10枚以内）

【提出先】

E-mail : fumikomu@bunsyakyo.or.jp 問合せ : 03-3812-3044 (担当 :)

別紙 1 : 事業スケジュール(報告版)

団体名 : 文京アートプロジェクト

実施内容 / 月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
各施設へ企画提示 & 作品募集		5/7～										
作品データ回収			①6/3～28 ②7/22～8/2 ③7/30～9/2									
ポスター・チラシ入稿				7/17								
カッティングシート入稿					8/27							
作品選定及び構成検討				7/8～	8/28～ 額装準備	●						
展示レイアウト確定						9/5						
コミュニケーター向け説明会						9/1						
触図作成						9/6～						
ポスター・チラシ納品～配布				7/29～	掲示板 : 9/9～14							
展覧会開催					9/14～17							
関係者振り返りアンケート回収						9/18～	●	●	●			
来場者アンケート集計						9/17～	●					
アーカイブ冊子作成								●	●	●	入稿	
フミコム/関係課との会議	4/15	5/15	6/5	7/17 ネットワー	8/27 施設管理			11/26				3/18

* 列の数・行の幅は必要に応じて変更してご記入下さい

別紙 2 : 収支報告書

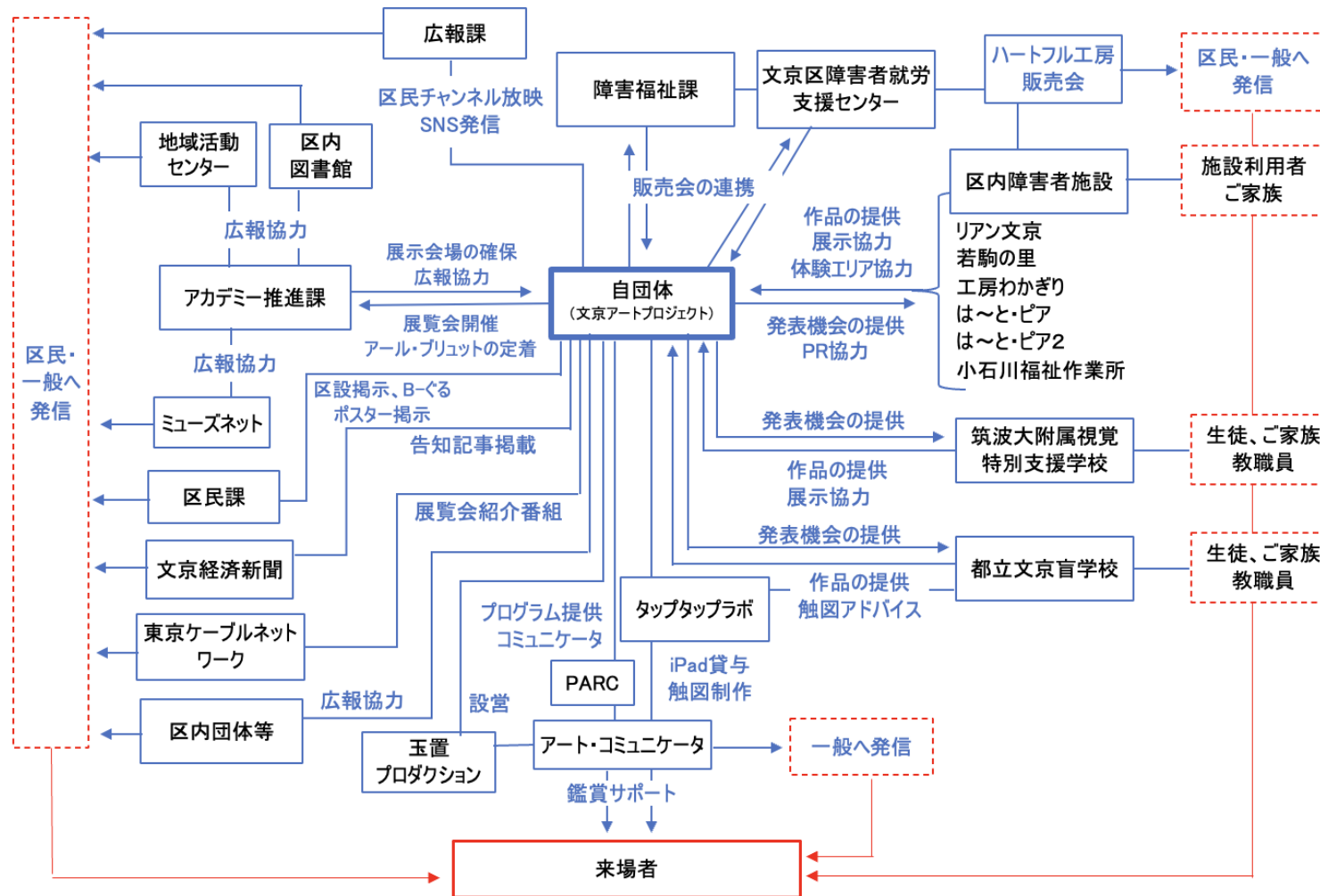
団体名 : 文京アートプロジェクト

収入 888,498 円

費 目	予 算 額	積 算 根 拠
「Bチャレ」助成金	864,000 円	
団体活動費	24,498 円	
	円	

支出 888,498 円

費 目	予 算 額	積 算 根 拠
ポスター・チラシ作成費	145,600 円	チラシ1種3,500枚、ポスター12種×40枚、印刷デザイン
掲示物作成費・備品	128,102 円	カッティングシート、説明パネル、キャプション、額縁、クロス等
設営委託費	60,000 円	設営・撤去
WS（触図等）材料費	24,315 円	触図、体験コーナー消耗品
iPad使用料	12,000 円	4日間
コミュニケーター謝金	288,000 円	3,000円×21人、5,000円×45人
アーカイブ冊子作成費	211,991 円	A4/54p×250部、印刷デザイン
雑費	18,490 円	配送用タクシー代、郵便代



自団体(文京アートプロジェクト)の役割:

企画提案、進行管理、アート作品発掘・選定、ブランディング、広報物・掲示物制作、展示プラン等